

## 看護系大学における卒業1年目研修に関する受講生の評価

Assessments to the Trainees for the First Training Year after Graduation  
from the Nursing University國松 秀美<sup>1,2)</sup>, 平田 美紀<sup>1,2)</sup>, 川嶋 元子<sup>1,2)</sup>, 千田 美紀子<sup>1,2)</sup>, 小山 敦代<sup>1,2)</sup>  
Hidemi Kunimatsu, Miki Hirata, Motoko Kawashima, Mikiko Senda, Atsuyo Koyama

キーワード 看護系大学, 卒業研修, 評価

Key Words nursing university, training after graduation, assessment

## 抄 録

**背景** A大学看護学部附属看護キャリアアップセンター（以下キャリアアップセンター）は、平成23年度に開設し事業の一環として卒業生のサポートを行っている。**目的** 平成26年度 A大学看護学部看護学科卒業生を対象に卒業1年目研修を実施し、研修内容の評価と今後の課題を検討することを目的とした。**方法** 平成26年度 A大学看護学部看護学科を卒業し、卒業1年目研修を受講した27名を対象に無記名自記式質問紙調査を行い、項目別に単純集計を行った。また、自由記載は、意味内容の類似したものを分類しカテゴリー化した。**結果・考察** 研修内容や有用性、仕事への活用についての質問に対して、「とてもそう思う」「そう思う」が合わせて100%であった。また、卒業後1年が経過する時期に研修を開催することは、卒業生が自らの経験を客観的に振り返る機会となった。**結論** 急変時対応について卒業1年目研修を行ったことは、卒業生の学びたい内容であり、今後の臨床に活用できる内容であった。

## I. 緒 言

A大学看護学部附属看護キャリアアップセンター（以下キャリアアップセンター）は、平成23年度看護学部と同時に開設し、地域の保健・医療・福祉現場における看護研究のための講座や研究支援を行っている（金森ら, 2014）。また、看護学部看護学科卒業生のサポートをしている。

大学での看護基礎教育は、文部科学省の掲げる「卒業時の到達目標」に照らして、広い視野での深い思考を基盤とした看護実践能力の育成と人間的成熟を目指している。また、看護師1年目教育は、医療の高度化や在院日数の短縮化、医療安全に対する意識の高まりなど国民のニーズの変化を背景に、臨床現場で必要とされる臨床実践能力と看護基礎教育で修得する看護実践能力との間に生じる乖離を埋め、新人看護職員研修の実施内容や到達目標を盛り込んだ新人看護職員研修ガイドラインの策定がなされた（坂本, 2011）。各医療施

設の新人看護師研修は、技術的側面を中心とした内容が組み込まれ、1年を通して系統立てた研修が実施されている（厚生労働省, 2014）。

しかし、実際の医療現場は、疾病構造の変化や繰り返される診療報酬制度の改定などにより、急激に変化している。その中で、看護師は疲弊し、人間関係を歪ませ、仕事についての意欲の低下やメンタルヘルスの不調を引き起こしている（吉岡, 2013）。また、メンタルヘルスの不調を訴えている看護師の半数近くは20歳代である。よって、看護基礎教育の場であった母校において卒業1年目研修を行うことは、卒業生の悩みが自分のことをよく知っている教員に卒業後も継続して関わってもらえるという精神的な安定をもたらすことが期待でき、卒業生が臨床を離れた場において自分の体験を通して振り返ることができる（吉岡, 2013; 唐澤ら2008）。このように母校において卒業生自身が新たな行動指標を確立できるよう支援することは、キャリアアップセンター事業の一つである

1) 聖泉大学 看護学部 看護学科 Faculty of Nursing, Seisen University

2) 聖泉大学 看護学部附属キャリアアップセンター Career Improvement Center, Seisen University

\* E-mail kunima-h@seisen.ac.jp

卒業生の支援と今後の充実・発展に繋がるといえる。

A 大学看護学部は、平成26年度1期生が卒業した。今回キャリアアップセンターでは、看護学部看護学科を卒業した看護師を対象に卒後1年目研修を実施し、研修内容の評価と今後の課題を得ることとした。

#### 用語の定義

卒後1年目研修：A 大学看護学部看護学科を卒業した卒後1年目の看護師を対象とした研修とする。

## Ⅱ. 卒後1年目研修の概要

### 1. 卒後1年目研修到達目標

- 1) 看護実践能力を高めるための基礎的な知識や技術を身につけることができる
- 2) 臨床での疑問点を明確にし、それを解決するための方法がわかる
- 3) 学習意欲を向上することができる

### 2. 研修内容

テーマ：「こんなときどうする？～急変時の対応～」

A 大学看護学部看護学科の教員と実習施設の救急看護認定看護師が講師を担った。研修内容は、①急変に結び付く危険な兆候とは、②アセスメントの方法、③意識障害・呼吸困難・胸痛と急変のアセスメントと対応について、講義と演習を90分間で実施した。

## Ⅲ. 方法

### 1. 研究対象者

平成26年度 A 大学看護学部看護学科を卒業し、卒後1年目研修を受講した27名

### 2. 調査日：平成28年3月25日

### 3. 調査方法

独自で作成した無記名自記式質問紙調査票と研究対象者への協力依頼文を研修日当日、受付時に調査票を配布した。調査票の回収は、研修終了後に研修会場出口に回収箱を設置し、投函しても

らった。

## 4. 調査項目

- 1) 受講生の基本属性（性別・病院の規模・所属部署の診療科）
  - 2) 受講生評価項目(3項目)①学びたいと思っていた内容でしたか、②得られた内容は有用でしたか、③今後の仕事に役立ちますか
- 2) の質問は、「4. とてもそう思う」「3. そう思う」「2. そう思わない」「1. 全くそう思わない」の4分位で回答を求めた。また、選択した理由を自由記述で回答を求めた。

質問項目については、キャリアアップ委員会にて協議し、プレテストを行い検討した。

## 5. 分析方法

回収したデータは、項目毎に欠損値処理し、単純集計を行った。自由記述については、質問項目毎に記載されていた内容を精読し、文脈毎に類似性に基づいて分類し、カテゴリー化し、キャリアアップ委員会において検討した。

## 6. 倫理的配慮

研究対象者には、調査協力は自由意志であること、調査票は無記名で個人が特定されないようにすること、不参加の場合でも不利益を被らないことを口頭および書面で説明した。また、調査票の回収は研修終了後に研修会場出口付近に設置した回収箱に委員が立ち会わないようにし、自由投函できるように配慮したうえで、投函をもって同意を得たこととした。なお、本研究は、聖泉大学倫理委員会の承認を得ている（承認番号：015-015、平成28年2月25日）。

## Ⅳ. 結果

調査票の回収率は85.1%（23名）であった。有効回答率は100%（23名）であった。

### 1. 受講生の基本属性

性別は、男性4名（17.4%）、女性19名（82.6%）であった。受講生が勤務している病院の規模は、100～299床以下4名（17.4%）、300～499床13名（56.5%）、500床以上2名（8.7%）、無回答4名（17.4%）であった。所属部署の診療科は、内科

項目	カテゴリー	人数 (%)
性別	男	4 (17.4)
	女	19 (82.6)
病院の規模	100~299床以下	4 (17.4)
	300~499床	13 (56.5)
	500床以上	2 (8.7)
	無回答	4 (17.4)
所属部署の診療科	内科系病棟	5 (21.7)
	外科系病棟	5 (21.7)
	混合病棟	1 (4.3)
	精神科病棟	4 (17.4)
	小児病棟	1 (4.3)
	手術室	1 (4.3)
	療養病棟	1 (4.3)
	回復期リハビリ病棟	1 (4.3)
	無職	1 (4.3)
	無回答	3 (13)

系病棟5名(21.7%)、外科系病棟5名(21.7%)、混合病棟1名(4.3%)、精神科病棟4名(17.4%)、小児病棟1名(4.3%)、手術室1名(4.3%)、療養病棟1名(4.3%)、回復期リハビリ病棟1名(4.3%)、無職1名(4.3%)、無回答3名(13%)であった(表1)。

## 2. 研修内容

### 1) 研修内容に関する受講生評価(図1)

研修内容に関する受講生評価は、3項目である。  
①学びたいと思っていた内容でしたかについては、とてもそう思う7名(30.4%)、そう思う16名(69.6%)、②得られた内容は有用でしたかについては、とてもそう思う10名(43.5%)、そう思う13名(56.5%)、③今後の仕事に役立ちますかについては、とてもそう思う12名(52.2%)、そう思う11名(47.8%)であった。

### 2) 自由記述について

なお、(1)、(2)、(3)文中のカテゴリーは

【 】, 記載内容は「 」で示す。

#### (1) 学びたい内容であったと思った理由

学びたい内容であったと思った理由は、15件の回答が得られ、【急変の対応経験が多い】【観察方法や対応方法が学べた】【繰り返し学習することが必要】の3カテゴリーに分類された。「急変が多い病棟なので対応を知りたかった」「急変をよく発見することがある」など【急変の対応経験が多い】ことが示されていた。

また、「まだまだ分からないことが多くスキルアップできた」「急変時のアセスメント、アプローチの方法が学べた」など【観察方法や対応方法が学べた】、「自分の課題を改めて知る」「自分の病院でも急変時の研修は受けたが難しかった」など【繰り返し学習することが必要】であるといった内容が含まれていた(表2)。

#### (2) 卒後1年目研修の有用性

卒後1年目研修で得られた内容が有用であったとする理由は、10件の回答があり、【自ら経験し

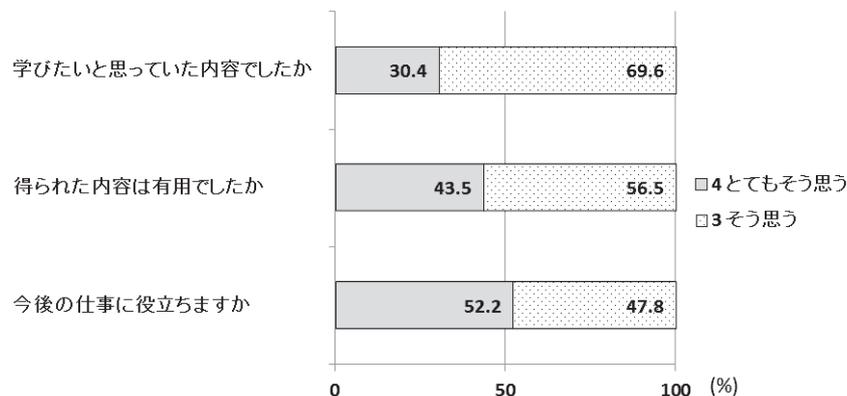


図1 研修内容に関する受講生評価

(n=23)

表2 学びたい内容であったと思った理由

(n=15)

カテゴリー	記載内容
急変時の対応経験が多い	<ul style="list-style-type: none"> <li>急変時にどこを見ればいいのか知ることができた</li> <li>急変が多い病棟なので対応を知りたかった</li> <li>急変をよく発見することがある</li> <li>急変が多い病棟であり心肺蘇生の確認ができた</li> </ul>
観察方法や対応方法が学べた	<ul style="list-style-type: none"> <li>心肺蘇生の確認が行えた</li> <li>急変に遭遇することが多いため</li> <li>臨床的な知識を聞くことができた</li> <li>キラーシンプトムの考え方は初めて知ることができた</li> <li>急変時のアセスメント、アプローチの方法が学べた</li> <li>急変時の観察ポイント、対応がわかった</li> <li>急変があまりないため学べてよかった</li> <li>まだまだわからないことが多くスキルアップできた</li> <li>急変時に何もできなかったので学んだことを活かしたい</li> </ul>
繰り返し学習することが必要	<ul style="list-style-type: none"> <li>自分の課題を改めて知る</li> <li>自分の病院でも急変時の研修は受けたが難しかった</li> </ul>

た急変時対応の振り返り】【患者の観察方法が理解できた】【今後の急変に活かせる】の3カテゴリーに分類された。受講生は、今回の研修前に「急変を経験してこれでよかったかなと思っていた」が、研修において【自ら経験した急変時対応の振り返り】ができた。また、「情報収集・アセスメント・観察ポイントがわかった」「どこを見てから動けばいいか明確になった」など【患者の観察方法が理解できた】内容であった。さらに、「1時間の内容でも自信がついた」「急変対応ができるよう一歩近づけた」など【今後の急変に活かせる】内容であった(表3)。

(3) 今後の臨床への活用

今後の仕事に役立つ内容であった理由は、11件の回答があり、【急変時に備えたい】【急変時に活用したい】【シミュレーションを実施したい】のカテゴリーとなった。「急変時の観察を深く知ることができた」「まずどこを見て何をしたらいいかがわかった」とする観察方法や対応方法の活用と「明日から早速習ったことをやってみる」「急変時出来る限りの対応を取りたい」など【急変に備えたい】内容であった。また、「キラーシンプトムを明らかにすると早期対応がしやすい」など習ったことを【急変時に活用したい】ことが示さ

表3 卒後1年目研修の有用性

(n=10)

カテゴリー	記載内容
自ら経験した急変時対応の振り返り	<ul style="list-style-type: none"> <li>急変を経験してこれでよかったかなと思っていた</li> </ul>
患者の観察方法が理解できた	<ul style="list-style-type: none"> <li>急変患者の観察方法</li> <li>どこを見てから動けばいいか明確になった</li> <li>実地的な知識が得られた</li> <li>キラーシンプトムのアセスメント方法を知った</li> <li>情報収集・アセスメント・観察ポイントがわかった</li> <li>意識障害の観察方法がとても大切だと感じた</li> </ul>
今後の急変に活かせる	<ul style="list-style-type: none"> <li>1時間の内容でも自信がついた</li> <li>急変対応ができるよう一歩近づけた</li> <li>急変時に活かしていけると思った</li> </ul>

表4 今後の臨床への活用

(n=11)

カテゴリー	記載内容
急変時に備えたい	<ul style="list-style-type: none"> <li>今日のことを思い出して対応したい</li> <li>冷静に考えられそう</li> <li>明日から早速習ったことをやってみる</li> <li>急変時の観察を深く知ることができた</li> <li>急変時出来る限りの対応を取りたい</li> <li>急変時に見る項目がわかった</li> <li>まずどこを見て何をしたらいいかがわかった</li> </ul>
急変時に活用したい	<ul style="list-style-type: none"> <li>急変があまりないが対応していきたい</li> <li>キラーシンプトムを明らかにすると早期対応がしやすい</li> </ul>
シミュレーションを実施したい	<ul style="list-style-type: none"> <li>シミュレーションを日々していきたい</li> <li>1分間シミュレーションなど活用したい</li> </ul>

れている。さらに、「シミュレーションを日々実施したい」「1分間シミュレーションを活用したい」と【シミュレーションを実施したい】という内容であった(表4)。

## V. 考 察

### 1. 卒後1年目研修の内容評価

研修内容の評価については、卒後1年目研修到達目標に沿って考察する。

#### 1) 看護実践力を高めるための基礎的な知識や技術の修得について

A 大学看護学部 of 平成26年度卒業生に対して、卒後1年目研修「こんなときどうする?～急変時の対応～」を開催した。卒後1年目研修のテーマとして急変時の対応を取り上げたことは、新人看護師が不安を抱く場面や職務上困難な看護技術として急変時の対応が挙げられているという先行研究(赤木ら, 2012; 唐澤ら, 2008; 永田ら, 2006), でも示されており、適した内容であったといえる。

受講生の基本属性は、約80%以上が病院勤務であり、所属する診療科は、内科系・外科系・急性期・回復期など、様々な部署で働いていた。受講生は急変が多い部署で働く者や急変の経験が少ない者が混在していたが、「急変時の観察ポイント、対応がわかった」「患者の観察方法が理解できた」など、急変時の観察方法や対応方法が具体的に学べ、看護実践力を高めるための基礎的な知識の修得に繋がったと推察する。また、「小児科であるが意識したい」「急変があまりないが対応していきたい」など、どんな部署で働いていても活用できる研修内容であったことが伺えた。

#### 2) 臨床での疑問点を明確にし、それを解決するための方法の理解について

受講生は、急変を経験した時に対応できなかった要因について観察項目やアセスメント能力が不足していたと気づいており、具体的な方法を学びたいことが伺えた。

また、勤務している施設において一次救命処置研修や急変時の対応シミュレーションを受講しているが、「急変を経験してこれでよかったかなと思っていた」「自分の病院でも急変時の研修は受けたが難しかった」と述べていた。このことは、卒業生自身が経験を振り返ることや繰り返し急変時の対応を学ぶ必要性に気づいていると考える。

また急変に備えたい気持ちの表れが次へのステップになる一歩を踏み出すことに繋がっているといえる。小林(2006)は、新人が次に同じ場面に遭遇した時に何かひとつでも役に立てるものがあるよう、冷静に振り返ることができる指導をこころがけていると述べているように、卒後1年が経過する時期に急変時対応の研修を開催することは、卒業生が自らの経験を客観的に振り返る機会となった。

このことは、臨床での疑問点を明確にし、それを解決するための方法がわかるという研修目標の到達に繋がり、今後も継続する必要があることが示唆された。

#### 3) 学習意欲の向上について

受講生は、「明日から早速習ったところをやってみる」「急変時出来る限りの対応を取りたい」などと急変に備える気持ちが表れていた。また、研修で学んだ知識を臨床へ活用するためには、「シミュレーションを実施したい」など繰り返し学習することが必要であることも理解できたといえる。さらに、研修では実習病院の救急看護認定看護師を講師としたことで目指したい看護師像や看護観の構築にも繋がり、学習意欲の向上という研修到達目標が達成したと推察される。これらのことより、卒後1年目研修は、キャリアアップセンターの事業内容として重要な事業のひとつであることが伺えた。

### 2. 卒後1年目研修の今後の課題

卒後1年目研修を急変時の対応に関する内容とした結果、受講した80%以上の卒業生が内容に満足していた。しかし、頭の中のシミュレーションだけでは不足していることが考えられる。織井(2016)は、シミュレーション教育の活用は、学習者が知識を拡げ、自らが学ぶ意味を発見し構築することを支援し、学習を促進させる自らが学ぶ学習スタイルへの転換であると述べている。このことから座学で学んだ観察項目やアセスメントについて、シミュレーションを通して実施することができれば対応能力の向上がより一層得られると考える。今後は、シミュレーターを用いた研修へと発展させていく必要がある。

今後も卒後1年目研修を継続し、卒業生の知識や技術の向上と同時に心理的安寧を与えることが重要な役割であるといえる。

## VI. 本研究の限界と課題

本研究では、キャリアアップセンターが初めて開催した卒後1年目研修の受講生を対象に質問紙調査を実施した結果である。今回は、対象人数が23名と少なく結果に偏りが生じている可能性がある。今後も継続して研修内容の評価を行い、キャリアアップセンターが主催する卒後1年目研修の在り方について検討していく必要がある。

## VII. 結 語

急変時対応について卒後1年目研修を行ったことは、卒業生の学びたい内容であり、今後の臨床に活用できる内容であった。今後もシミュレーション研修等を視野に入れて内容を改善し継続していく必要があることが示唆された。

## 文 献

- 赤木美代子, 岩藤寛子, 橋本明奈, 他 (2012): 急性期看護に携わる新人看護師が不安を抱く場面—入職後4ヵ月の質問紙調査より—, 第42回日本看護学会論文集看護管理, 52-56.
- 金森京子, 磯邊厚子, 大籠広江, 他 (2014): 一看護系大学の地域貢献活動におけるキャリアアップ講座の分析—医療従事者の受講者自己評価アンケートから—, 聖泉看護学研究, 3, 55-66.
- 唐澤由美子, 中村恵, 原田慶子, 他 (2008): 就職後1ヶ月と3ヶ月に新人看護者が感じる職務上の困難と欲しい支援, 長野県看護大学紀要, 10, 79-87.
- 小林祥子 (2006): 急変時の対応とその指導, BRAIN NURSING, 22 (3), 35-40.
- 厚生労働省 (2014): 厚生労働省ホームページ, <http://www.mhlw.go.jp/> [検索日 2015年12月10日].
- 文部科学省 (2004): 文部科学省ホームページ, <http://www.mext.go.jp/> [検索日 2015年12月10日].
- 永田美和子, 小山英子, 三木園生, 他 (2006): 新人看護師の看護実践上の困難と基礎看護教育の課題, 桐生短期大学紀要, 17, 49-55.
- 織井優貴子 (2017): 看護シミュレーション教育 基本テキスト 設計・実践・評価のプロセス, 日総研出版, 16-20, 愛知.
- 坂本すが (2011): 新人看護職員研修の手引き ガイドラインを活用した研修の実際, 日本看護協会出版会,

8-29, 東京.

聖泉大学: 聖泉大学看護学部附属キャリアアップセンターホームページ, [http://www.seisen.ac.jp/gakubu/kango/career\\_up\\_center](http://www.seisen.ac.jp/gakubu/kango/career_up_center). [検索日 2015年12月10日].

吉岡由喜子 (2013): 現在の看護師がおかれている状況と看護基礎教育とのギャップについての一考察, 大成学院大学紀要, 15, 137-148.